

今回は、揚州市の文化や芸術について紹介するが、その前に先日ある友人と食事した時、彼が5月に唐招提寺に行ってきたと言うので、ちょうど鑑真について書いた後でもあり話が弾んだが、その会話の中で出た「瓊花(チョンホア)」と言う花を紹介したい。

彼の話によると境内には黄白色の花をつけた瓊花が、あたかも打ち上げ花火が夜空に咲いたように満開であったと言う。この花はなんと揚州市が原産地である。ネットには、

「隋から唐の時代、その芳香ある黄白色の花が愛でられたという。ただこの花は聚八仙という台木に接ぎ木して増やしていたが、やがて元軍の侵入と共に絶えてしまった。日本では鑑真和上の縁でゆかりの寺・大明寺から贈られたものが、奈良の唐招提寺や飛鳥寺などに植栽された。高さは4メートルほどになり、黄白色の両性花と周囲に8個の真っ白な装飾花を咲かせる。別名で八仙花とも呼ばれる」

とある。この内容が正しければ、すでに揚州市で見られなくなった花が日本のいくつかの寺の境内で参観者の目を楽しませてくれているということだ。隋の煬帝はこの花を愛したと言うが、鑑真和上もきっとこの花が好きであったであろう。いつの日かパンダではないが日中友好の証としてこの瓊花が里帰りすればいいと思った。ちなみに「八仙花」は通常アジサイのことであるが、そう言われればガクアジサイによく似ている。

ここで揚州市の文化・芸術に移ろう。揚州市は、'揚州・その1' で書いたように少なくとも7～8世紀ころは長安、洛陽に次ぐ大都会であった。これは全長2500kmの京杭大運河の完成(610年)により交通の要衝となったことから、人と物が集まる街に



咲き乱れる瓊花(けいか)、唐招提寺境内にて

変貌したからである。経済が発展すればその地に大富豪が生まれるのは世の常である。

揚州は「塩商人」と呼ばれる塩の利権を得た大富豪が多数生まれた。塩は日本でも以前は専売商品であったが、中国も歴代王朝は塩の専売制を踏襲したのだ。専売には利権がつきものであることは昔も今も変わらない。揚州は海に面しているわけではないので製塩で巨万の富を築いたわけではない。もっとも長江が運んだ土砂により海岸線が東に移動したようであるから当時の揚州はもっと海に近かったかもしれない。いずれにしても物の本には揚州の塩業は漢代(BC206年～AD220年)から次第に発達していったとある。

中国は、歴代王朝が北方からの異民族の流入を防ぐため、万里の長城を逐次構築し辺境には多数の軍隊を常駐させた。その軍隊へは貴重な塩と食糧を供給する役目を揚州商人が担ったのだ。

どこの商人でもよさそうなものであるがなぜ揚州なのであろうか。京杭大運河は紀元前486年から呉王夫差が掘削を始めたことと既述したが、私は次第に長安や洛陽に向かって運河が伸びるにつれて歴代王朝は揚州商人を活用し江南の豊かな物資を運

河を利用して、万里の長城付近の軍隊の駐屯地に運び入れたのではないかと思うが如何であろう。

この揚州の塩商人や織物商人は巨万の富で文化・芸術を支えたのである。とくに明、清時代には中国最大の塩流通の根拠地として繁栄した。後述する「揚州八怪」と言われた文人画家群の活躍は清代であり、蘇州の庭園のような庭園もこの時代に造られているものが多い。時代は遡って、揚州との関わりが深くこの地で没した暴君で名高い煬帝は実は隋代を代表する文人であり詩人であった。煬帝の作品は中国文学史において高い評価を得ているという。彼の、静寂に覆われた長江の夕暮れを描写した作品をここに紹介しておこう。

春江花月夜

暮江平不動（暮江平にして動かず）

春花満正開（春花満ちて正に開く）

流波将月去（流波月を将いて去り）

潮水帯星来（潮水星を帯びて来る）

彼のイメージと異なる穏やかな美しい詩である。次の唐代（618年～907年）はご承知のようにキラ星のごとく大詩人を輩出した時代であるがその中で李白、白居易、杜牧など多くの詩人がこの地を訪れている。また宋代では王安石、欧陽脩、蘇東坡など（この3名は散文における唐代、宋代の最も優れた作家と言われる「唐宋八大家」に含まれている）がこの地で役人を勤めたり旅行したりして、揚州を描いた文学作品をあまた残しているようだ。隋・唐の時代から明・清にかけて揚州は文化の大きな発信地であったと言っても過言ではない。

さて「揚州八怪」である。これは清朝の乾隆帝の時代に現れた揚州を代表する一群の文人画家を言う。八怪というからには八大画家と思われるが、いろいろな説があり必ずしも八人という訳ではなさそうだ。文人画家とは、中国においては職業画家の画に対し、文人が余技として描いた絵画をいう。

当時、職業画家は技巧にばかり拘泥する、と批判する動きが顕著になり、画家の内面性、精神性を表現する絵画が評価されるようになっていった。そう

した流れの中で「揚州八怪」の一派は、画風は自由奔放であり、個性的で揚州画壇に新風を巻き起こした。彼らは花鳥画に優れ、四君子と言われる、梅、蘭、竹、菊を好んで描いた。「怪」という漢字をなぜ使ったかであるが、「当時の伝統的画法に比べ、奇異であるとともに優れている」とのニュアンスのようだ。当時の革新的な流れをよく表しているのかもしれない。ちなみに文人画は日本には室町時代に伝えられ、江戸時代中期以降に盛んになったという。池大雅、与謝蕪村、谷文晁、渡辺華山らは江戸時代の文人画の代表格とされる。

ここで「四君子」の説明に移ろう。先に挙げた四つの草木が君子のあるべき姿をよく表しているというのである。それぞれの草木を一語で表す言葉と解説をまとめると次の通りである。

梅：高潔 冬の寒さに負けず、風雪の中でも凛々しく開花する。孤高で人に迎合しない品格を持つ花。季節は冬を表す。

蘭：清逸 優雅な姿態と高貴な香りを持ち、清らかなイメージの花。季節は春を表す。

竹：節操 真っ直ぐ伸びる姿は「純粹で正直な品格」、強い節は「屈しない節操」、空洞は「謙虚な精神」に例えられる。季節は夏を表す。

菊：淡泊 草木が枯れ始めた晩秋に咲き始める。寒い西風をものともせず瑞々しい香りを放ち、静かに且つ美しく咲き誇る花。季節は秋を表す。

それぞれが君子のような品格を持っていることから、当時から中国人は「四君子」と呼んだのであろう。そして八怪がこの四君子をよく描いたわけは、基本的な筆遣いを全て学べるからだそうだ。

四君子はまた、四つの草木を全て使った図柄をも示すとある。その図柄を「四君子紋」とか「四君子文様」といって四季を通じて縁起の良い図柄として着物や帯に使われてきたようだ。中国では縁起の良い「吉祥文様」として人気の図柄のようだ。四君子紋が入った着物や帯を私は見たことがないので何人かの方に尋ねたが、見たことのある方は残念ながら

なかった。四君子は麻雀の花牌として4枚一組で中国では使われているらしいが、日本の麻雀には使われない。以前、私は花牌の入った麻雀牌を見たことがあるがとても綺麗であった。

四君子に対する中国人の考え方と書いたが、いつの時代からいつまでの時代の中国人の考え方は知らない。これと違った感覚の人がいる。それは儒学者であり哲学者の周敦頤(1017年～1073年)という人だ。彼の書いた「愛蓮説」は、蓮の高潔さを称えながら華美なものばかり賛美する少なくとも北宋(960年～1126年)時代の世相を風刺した有名な文章であるが、それによると、「菊」は、世間の煩わしさから逃れる「隠逸の花」と書いてある。どうみても君子のイメージではない。

一方「蓮」は君子の花であり、「牡丹」は富貴の花であるという。同じ「高潔」と言っても、方や梅であり、方や蓮であるという。時代によるのか、人によるのかは分からない。分からないついでに言えば、中国の国花は牡丹であるが、牡丹が四君子に入れてもらえないのは、君子のイメージではなく貴族あるいは資本家のイメージなのか。

私は中国国内をあちこち旅したが、牡丹は洛陽には一度も行ってないせいかお目にかかったことがない。よく見る花は断然蓮の花が多い。牡丹は別名を「富貴花」とか「百花王」とも言うそうで、いかにも中国人が好みそうな花ではある。なお中華民国は中国全土を支配していたころの1929年に国花は梅と定めている。やはり中華民国と中華人民共和国とは国の姿や考え方が異なっていることが多い。

次に観光地をいくつか紹介しよう。私は揚州には行ったことがないのでガイドブック等からの受け売りである。一つは「个園」である。清代に造られ、竹と山石で有名だそう。最初にこの庭園を本で見たと、き、「个」という字は一個の個の簡体字とばかり思っていたが、実は竹を意味していてこの字の形が竹の葉に似ていることからここに使われたという。

私の辞書で「个」を引いたが、竹を意味するとは出ていなかった。典型的な江南様式の庭園であった。もともとは清代の画家の石涛が所有する邸宅の庭

だったという。彼は塩商人ではないが、塩商人は巨万の富により競ってこのような庭園や楼閣を造り、書画を求めたのである。

もうひとつ有名な観光地は、「瘦西湖公園」である。この公園の名は細い西湖という意味だ。杭州の西湖に似ているが形が細いのでこの名がついた。国家5A級の観光地である。園内には有名な建物がいくつもあるそうだが、ここでは北京の北海公園の白塔にそっくりの白塔についての言い伝えを紹介しよう。

「乾隆帝が揚州行幸の折、「ここには北京のような白塔があるか」と尋ねた。役人は出まかせに『あります』と答えたが、なんと乾隆帝は翌日それを見に行くことになってしまった。

皇帝を欺けば大変なことになるので役人たちは夜を徹して塩袋を積ませ塔を造らせた。幸いなことに翌日は霧がたちこめ、乾隆帝はぼんやりとかすむ白塔を見てたいそう喜んだという。役人たちは次の行幸でまた見たいと言われたら大変とばかり、そこに本物の白塔を建てたという」

乾隆皇帝は中国全土をくまなく巡幸され、各地に足跡を残された皇帝としても有名であるが、このような言い伝えは各地にたくさん残っているであろう。言い伝えと言えは揚州市内に三つの井戸がある。「宋井」、「八卦井」、「玉井」であり、それぞれに物語があるのであるが、紙面の関係で割愛したい。いつの日か揚州に行ったときはわりい紙上に物語を紹介する時があるかもしれない。

最後に食文化についてすこし書き加えたい。揚州料理はあっさりした味付けで美味であるそう。今の上海料理の原点は揚州にあるとのこと。その昔チャーハンと言えは中国ではご飯と卵を炒めたシンプルな料理であったが、揚州で様々な具材を混ぜた「五目チャーハン」を作り出したという。揚州は刃物の名産地であるがこれが料理に大いに貢献したのではないか。「揚州商人」という中華料理店が町田にもあるが、いつかその店で「五目チャーハン」を食べてみようと思っている。

(終わり)